

若山牧水第 12 回顕彰全国大会みなかみ大会

平成 30 年度
若山牧水みなかみ紀行短歌大会
作 品 集



若山牧水顕彰全国大会みなかみ大会実行委員会

若山牧水第十二回顕彰全国大会みなかみ大会

平成三〇年度若山牧水みなかみ紀行短歌大会

入賞・入選作品

【若山牧水賞】

矢も盾もたまらず友は行けるだけ行くと旅立つ罹災りさいのふるさと

宇和上 正

【みなかみ町長賞】

旅人と書かれたカルテのひと括り案じをりてもその後を知らず

真庭 ヨシ子

【みなかみ町議会議長賞】

寂寥のこころ抱きて来し旅にどこか吾に似る老いが畑打つ

真庭 義夫

【みなかみ町教育長賞】

雪しろのみなわ逆巻き峡くだる坂東太郎の旅立ちのさま

谷川 治

【選者賞 伊藤一彦 選】

微細なる粒子の音に過去を聴く旅の土産のエジプトの砂
骨ばった震える指で画面広げ卒寿の母はスマホで旅する
人生の旅の終りに何を見る答へぬ父は遺影に笑ふ
隣家の子猫に会いにひとり行く幼き吾子の二時間の旅
景色さへ見るいとま無く語りあふ絶交解きし親友との旅

【選者賞 阿部栄蔵 選】

西伊豆の入り日を夫と眺めみき最後の旅となるとも知らず
梅雨晴の三国路の旅万緑まんりよくの中に真白ましろく山ぼうし咲く
豪州の旅が最後になりしかと南十字を染みじみと見む
隣町の宿の浴衣に着がえればみな旅人となる同級会
旅の空川辺に咲ける立葵たちあおい風のさやかに揺れるはなびら

森 本 義 臣

深 串 方 彦

奥 村 清 美

佐 藤 真 理 子

善 如 寺 裕 子

掛 川 真 由 美

高 橋 吟 子

石 坂 喜 美 江

横 山 美 保 子

秋 山 充 利

【みなかみ町牧水会長賞】

父と行く旅の終わりはいつだってこれが最後と思ひまた行く

田中 亜紀子

【水上短歌研究会会長賞】

一度だけ父と母とが旅をした草津の旅を妻とするなり

市川 光男

【月夜野俳歌壇会長賞】

風花を宿の窓辺に夫と観き最後の旅となるとは知らず

湯浅 茂子

【桑の実俳句会長賞】

招待の旅だと母を謀って中尊寺へとバスに揺られる

高橋 圭子

【みなかみ町観光協会会長賞】

休日は光を求め本屋から本屋へ旅するてふてふになる

熊谷 純

【みなかみ町文化協会会長賞】

濃き淡き緑を纏ふ峽の瀬に雪解け水の旅ははじまる

前田 明利

【入選】 三〇作品

川霧の湧きたつ街よ外泊を許されし日の夫との旅寝

神澤静枝

出無精で高所恐怖と言う父が曾孫見たさにパリに旅立つ

若山巖

「先生の頭の禿の」と詠れたる牧水行路の「小雨」への旅

細矢九谷

かの時は最後の旅とは思はずに穴道湖の夕陽夫と眺めき

深澤巴

靴づれで歩けなくなりし友のため予備靴貸して旅をつづくる

野崎和子

萬葉集、古今集から牧水へ時の流れを我は旅する

高橋好恵

行く先がもう丸見えの峠なり深呼吸して旅を続ける

大庭拓郎

死語となる言葉のひとつかも知れぬまだ辞書に載る「旅人算」は

桑原謙一

人生の旅のはじめやみどり児は力いっぱい宙をけりたり

菅谷和子

頭をよせて夫と孫とが地図をみる旅の宿より探す島の名

大栗紀美子

少年に帰れる夏が巡り来て夢を旅する麦藁帽子

舘洞嗣雄

書道部の夏の合宿上牧の旅館に籠り「灌頂記」かんちようき書く

川崎照子

いつの日か一人の旅となることを話したりしてふたりで歩く

西塚洋子

みなかみの旅は楽しも初雪に谷川の峯聳え立つ見ゆ

白石政江

春みぞれ友と酌みあふ旅宿の焼き味噌あてにふくふく旨し

小野系子

この靴はどこを旅して来たのだろう無口な君を洗う週末

桑原環世

永き旅終へし駱駝の足のごと葡萄の幹は露霜にたつ

村田磨理子

二歩三步夫の歩幅に合はせつつ六十余年の旅路おもほゆ

木村あい子

なき父と夢で会ふ旅終へてまた今宵誰かと出会ふ旅かも

清水静子

北・南旅するごとく転勤し子は定年も間近かとなれり

白井清子

長きこの旅の途中に離別もしいま猫二匹と平穩なる日日

森泉紀子

倒木の根方にはほのかな花のあり霧につつまれ山旅行けば

熱田民恵

今の世の旅おわりなば父母ちちははにふたたびまみえん心してゆかな

小栗純江

沖繩戦海に逝きたる父偲び砂握りしむ旅の悲しき

木村初枝

あたらしき宿の屋号の焼印の下駄の木の香や旅人を待つ

清水良郎

風薫る中学校の図書室は自我に目覚めし旅の始まり

保坂スミ

一度ならず草津の旅は二度三度連れの変はれば道中新らし

林 惠美子

父の待つ黄泉の国へと母の旅棺の馬車に花嫁姿

青山昌子

父母ちちははとともに旅せし瀬戸内海かんちようせん観潮船の波に揺れつつ

松田恵子

旅立ちの用意ととのへたんぽぽの綿毛ふんはり風を待ちをり

瀧田茂子

入賞作品講評

【選者紹介】

伊藤 一彦（いとう かずひこ）

昭和一八年（1943）宮崎県生まれ。「心の花」選者。読売文学賞、迢空賞、斎藤茂吉短歌文学賞などを受賞。若山牧水記念文学館館長。歌集に『海号の歌』、『微笑の歌』、『月の夜声』、『光の庭』ほか。評論集に『若山牧水―その親和力を読む』、『牧水の心を旅する』などがある。

阿部 栄蔵（あべ えいぞう）

昭和一四年（1939）群馬県生まれ。「黄花」主宰。群馬県歌人クラブ事務局長。日本歌人クラブ群馬県代表幹事。群馬県文学賞短歌部門選考委員。歌集に『二人静』がある。

【若山牧水賞】

矢も盾もたまらず友は行けるだけ行くと旅立つ罹災りさいのふるさと

宇和上 正

《評》災害の多い今の日本を象徴する歌である。自分ではなく「友」の旅とすることで歌に説得力が増した。上二句の慣用語も友の言った言葉なので、これで生きていく。

【みなかみ町長賞】

旅人と書かれたカルテのひと括り案じをりてもその後を知らず

真庭 ヨシ子

《評》観光地にある診療所なのである。旅に病んだり怪我をした患者のカルテを一括りにして保存しているという。下句に一回限りの患者への思いが表現されている。

【みなかみ町議会議長賞】

寂寥のこころ抱きて来し旅にどこか吾に似る老いが畑打つ

真庭 義夫

《評》もの寂しい思いを胸に旅をする途中、畑を耕して居る老いを見て自分を重ねているのであろう。この歌も下句がよい。下句によって作者独自の歌になった。

【みなかみ町教育長賞】

雪しろのみなわ逆巻き峡くだる坂東太郎の旅立ちのさま

谷川 治

《評》川の上流から下流へのながれを「旅」と捉えた作。坂東太郎のその旅立ちのさまを表した。「雪しろのみなわ逆巻き峡くだる」が力強く確かである。

【選者賞 伊藤一彦 選】

微細なる粒子の音に過去を聴く旅の土産のエジプトの砂

森本義臣

《評》エジプトに旅した人から土産にもらった砂。小さい瓶に入っているのだろう。瓶を振って音させ、それを「過去を聴く」と表現したのがいい。昔を引きよせている。

骨ばった震える指で画面広げ卒寿の母はスマホで旅する

深串方彦

《評》九十歳の母が「スマホで旅する」の言い方が面白い。現実には行けなくなった旅行の代わりにスマホの旅。「骨ばった震える指で」は強調表現だろう。

人生の旅の終りに何を見る答へぬ父は遺影に笑ふ

奥村清美

《評》亡くなってまだ問のない父だろうと思う。上の句の問いかけは切実な言葉だ。父からの答えはなかったか。いや、あつたはず。遺影の微笑にその答えを感じたのでは。

隣家の子猫に会いにひとり行く幼き吾子の二時間の旅

佐藤真理子

《評》旅という長い時間のを思うが、この旅はわずか「二時間」。なるほど幼い子供にとっては隣家に出かけるのも旅。ユーモアを感じさせる楽しい歌である。

景色さへ見るいとま無く語りあふ絶交解きし親友との旅

善如寺裕子

《評》親同士だから遠慮なく言い合うこともあつたのだろう。その絶交が解消されての喜びの旅である。「景色さへ見るいとま無く」が一人の気持ちすべて言い表している。

【選者賞 阿部栄蔵 選】

西伊豆の入り日を夫と眺めみき最後の旅となるとも知らず

掛川 真由美

《評》どちらが遺るなんてことを思うことなく、夫と一緒に入り日を眺めていたのに、西伊豆の旅が夫と最後になつたという。結句「なるとも知らず」があわれである。

梅雨晴の三国路の旅万緑の中に真白く山ぼうし咲く

高橋 吟子

《評》三国路を歩いての旅であろう。見える限りの緑の中に白き山ぼうしが咲いているという。梅雨晴、万緑、真白き山ぼうしと季節感が表現されて、情景が浮かぶ。

豪州の旅が最後になりしかと南十字を染みじみと見む

石坂 喜美江

《評》海外旅行もこの豪州の旅が最後と、澄んだ中、天に煌めく南十字星を今しみじみとみようという。南国に見る南十字は、鮮やかに煌めいているのであろう。

隣町の宿の浴衣に着がえればみな旅人となる同級会

横山 美保子

《評》隣町のよく知り尽くした観光地であるが、宿の浴衣を着ればみな旅人になるという。同級会であるから同じような思いの友なのであろう。「みな」が効いている。

旅の空川辺に咲ける立葵風のさやかに揺れるはなびら

秋山 充利

《評》旅の地の川辺に咲いている立葵のはなびらがさやかな風に揺れているという。全体的に響きの良い叙景歌。風に揺れている立葵の情景が浮かんでくる。

【みなかみ町牧水会長賞】

父と行く旅の終わりはいつだってこれが最後と思いまた行く

田中 亜紀子

《評》かなり年輩の父親だろうか。「いつだってこれが最後」の旅と思い行くというのだから。父親は娘の誘いにいつも応じたに違いない。父に対する愛情と優しさ。

【水上短歌研究会会長賞】

一度だけ父と母とが旅をした草津の旅を妻とするなり

市川 光男

《評》両親が一度だけ夫婦で旅した土地を、作者が妻と訪れるという。その事実だけを淡々と述べて歌って印象に残る。「草津」の地名も生きている。

【月夜野俳歌壇会長賞】

風花を宿の窓辺に夫と観き最後の旅となるとは知らず

湯浅 茂子

《評》夫と宿の窓辺に寄り添いながら夫と最後の旅になるとは知らず、風花をみていたという。その時の風花の美しさを観きと表現したのであろう。人生の無常を感じる。

【桑の実俳句会長賞】

招待の旅だと母を謀って中尊寺へとバスに揺られる

高橋圭子

《評》旅行の喜びを味わわせたいのに出かけようとしないう母。そこで「招待の旅」だと言って旅に。だます、ごまかすの意の「謀って」の語に作者の強い意志がある。

【みなかみ町観光協会会長賞】

休日は光を求め本屋から本屋へ旅するてふてふになる

熊谷純

《評》日頃は仕事が忙しく、本屋に立ち寄る時間などないのだろう。そこで休日は、蝶が蜜を求めて旅するように、本屋へ「旅」するという。いかにも本、本屋好きの作者。

【みなかみ町文化協会会長賞】

濃き淡き緑を纏ふ^{かひ}峡の瀬に雪解け水の旅ははじまる

前田明利

《評》利根川の源流なのであろう。峡全体が濃い緑や淡い緑に覆われるようになると雪解け水が混じり、雪解け水の旅がはじまるという。結句、作者ならではの発想。

作 品 集

応募総数 457首 / 302人

作品集の作成にあたっては、受付順に、原作のまま掲載しました。

旅のみやげぶら下げラッシュの電車では待つ子の笑顔思い踏ん張る

井野口 勝則

ウイスキー酒もワインもアルコール醒まして渉る彼岸への旅

平 八

草枕旅にしあれば水上の山河語りて微醉^{びすい}を誘ふ

大村 博子

露天風呂つかりて肩の力ぬく出荷終えての木曾の旅なり

市川 光男

沢渡りの橋を越へ来て牧水の旅姿想ひ峠をめぐす

高屋 敏子

クラス会の温泉旅行の宴会で八木節を歌う小皿叩いて

若山 巖

べらんめえ口調を封ず七日間フランスをめぐる旅行に父は

若山 巖

旅先の賢治遊びし川宿にイーハトーブの夢追ひかくる

堀ノ内 和夫

北国へ旅し求めたオルゴール妻とは聞かぬエリーゼのために

井野口 勝則

下北の旅にて思ふ田や畑棄農の果ての藪のまた藪

金澤 隆男

定年の記念の旅の裏日本窓打つ雨に來し方顧みる

金澤 隆男

海越えて一時帰国の孫と旅真鶴岬の蟹を追ひたり

金澤 隆男

若き時人生さまよふ旅重ね八十才越え宝となりぬ

堀越 京子

打つ波に角の取れたる石並び積丹岬に立ちて眺める

子と孫が誘ひくれたるネブタの旅妻の写し絵胸にいだきて

「とまの耳」の雪解の見えしこの夕方伯母に招かれし旅路を憶う

暮坂の峠をゆるり旅すれば牧水の吐息しきりと覚ゆ

姉妹旅これが最後と口癖の妻は術後の腰に気兼ねす

身の丈に生きて苦節の長旅も老いたればこそゆるり過ごせり

戦後とて妣の実家へ糧求む幼き足の二里の旅

子のために良き縁願ひ出雲まで夫と旅きて五円の札買ふ

遠慮なく醤油のほひと御煎咬む音が背を襲ふ旅行く車中

兄の住む横浜の地に招かれて農を離れて妻と旅立つ

海を見て旅愁覚ゆも我が身には山を親しむ故郷ありぬ

訛ある各駅停車の駅の名を聞くともなしの北の旅なる

行きたしと思えど叶わぬ旅と知れ回る地球儀夢のひとつとき

堀越京子

今井栄一

細矢九谷

高島蓉子

番場正夫

番場正夫

番場正夫

深澤巴

仁戸久孝

林郁男

林郁男

眞庭義夫

片桐幸子

旅人の足遠のきし湯の里をつばくらめ飛ぶ往時のままに

男をの孫とプラレール敷き夢の旅七十七歳を幼に還りて

千本浜の松にもたれてしばし聴くはるけき昭和のわたつみの声

佐渡旅行夫つまと十年通いしも全島まわり彼のか日の思い出

フェリーにて渡るを昼月出でいしを記念写真の宮島の旅

白銀の湯をあふれしむ露天湯に青葉浮きたる旅の宿かな

どのやうな旅経て砂丘に來たのだらう駱駝は海の果たてを見をり

猫の町友と旅する夢を見し目覚めてなほも心旅する

旧蹟を巡り來たりて旅の駅特急待つ間に足湯に憩う

牧水の歌を思ひて巡らすは魂癒す旅と瞑想

空想の翼広がるひとときは初めての地を旅するがごとし

一人旅してみむと地図をながむれど方向おんちの我には難し

塞翁が馬の続きはどうなった一人の旅の湯に浸かりつつ

前田明利

前田明利

羽田野とみ

柴山利枝

佐藤政俊

高原晴子

高原晴子

吉田まゆみ

蓮見孝子

竜田信子

高橋好恵

高橋好恵

松田美智子

南部鉄の風鈴平和の音色なり傘寿の記念に子がくれし旅

もう再び訪れなしと心に決む子に連れられし沖縄の旅

故郷はどこと問われて港唄北の寂しい海霧のあの町

足失くし歌友の遠出に距離を置き記憶の中の旅路を辿る

先先の名酒も旅の友として牧水がゆくみなかみ紀行

別れ路にいつも選択誤りしわが人生の旅は灰色

待ちに待ち釣旅釣果河原焼き解禁酒に若鮎美味し

茅葺きし古風のそば処秋ソバ食むも旅のよすがに

久かたに君を誘ひ湯煙の上るし宿に旅の終はりを

旅先で産地直売りんど食む産地のりんごスーパーに笑む

孫娘時どき休日旅行出づ旅行にはあらづチャニースの追っかけ

みなかみの派出所勤めの二年はうから道づれ旅路の半ば

晩春のアカシボに染まる尾瀬ヶ原木道独り旅のはじまり

増田津恵

増田津恵

鎌田誠

鈴木多美子

深津一次

深津一次

後藤憲之

野口弘

野口弘

野口弘

野口弘

田島美徳

田島美徳

亡き妻と旅した岬訪ぬれば今も変らぬ波のきらめき

宮崎の旅は道連れキャンプ地に野球談義の尽くることなし

夫つまが選つび旅に求めし笠間の茶碗今も戸棚にそのままにあり

旅の宿二歳の女孫とかくれんぼ喜寿の祝ひ日最上の笑み

京の旅清水寺のにぎはひに逸れまいぞとしかと夫の手

金婚式を祝ふ旅は何処にせむ東北も良しと夫の夜話し

水よりも心を映す盃の酒に茜の雲の旅ゆく

立つ旅にあとずさりせし足裏あなうらをふるさとの橋問うなく渡す

旅宿の石の腰掛ふろの中座り心地にほつと一息

「ひとり旅こころ寂しき夕暮れの」と詠みし青春のとおき想い出

桜花小さな駅に咲き満ちてそこ通りゆく君との旅は

老犬を看取りし今はひたすらに黄泉への旅路ただ祈る吾

自然美と史蹟に惹かれ徒然にみなかみの季旅情満喫

黒木金喜

遠藤玲奈

深澤巴

椎名喜代子

椎名喜代子

椎名喜代子

鈴木仁

瀬戸内光

森下常勝

桑原謙一

桑原謙一

うめさわかよこ

今成美泉

渡り来るはつ夏の風受け止めて刻を豊かに水郷の旅

連休はどこへ旅行と地図開く様変りした戦後の暮らし

伊豆の旅静かに暮れる夕つ方卯波待つらしサーファー二人

旅にあり吾が里の名を問う人に月夜野という由来話せり

岩を食む利根の清流見下ろしつつ旅行幹事の言葉をさがす

暮坂の峠を越えし牧水の旅しのびつつ山路を歩む

玉手箱あけてみようかと妻がいう金婚記念の旅も待てずに

四歳の娘おじぎができたなら旅箆筒に宇宙見えるかな

売店に鳥取の女と談笑す再び逢いたい隠岐島の旅

六合村に草鞋をはきて尋ねしとう古え歌人の秘境の旅よ

西部へと旅する民を拒みぬし塩の荒野に子ら遊びをり

旅の夜受話機に遠き恋人の口より首都の梅雨入りをきく

はてしなき旅へとたちし母にしてその母に誦む無量寿経

角田勝子

林 いくじ

高橋吟子

高橋吟子

光山半弥

光山半弥

小畑定弘

初霜若葉

太田きみ子

太田きみ子

名川由江

正岡朋華

藤井重行

終活の自分捜しの旅つづく一筋けむり上る空あり

原 ひろし

縁ありてふたたび詣づる青島神社高千穂めぐりの旅の終りに

古井 富貴子

旅立ちを見送る家族なきことも知らずに伯母の童女の寝顔

角田 正雄

昔ここ牧水旅した山の道今猿の郡我者顔で

廣井 婦志江

御先祖の文化文政朱印帳旅の巡礼吾が家の足跡

深津 幸子

田植済み夫は旅立ち二十年感謝をこめて息子経上げ

深津 幸子

長き旅我が人生を短歌にして今日もみんなに感謝して生く

久保田 好子

ましぐらに急流のぼる旅のすゑ鮭は次つぎ卵産みて果つ

菅 泰子

遠い日のあの幸せを抱きしめて一人旅する三保の松原

澤浦 ツヤ子

常備薬リュックに夫は確認し旅立ち行きぬ杖を手にして

石原 信子

旅先にて握手交はせしロボットの長けし脳波を思ふたまゆら

石原 信子

「観音寺に帰らして」とくり返す旅の途中の祖母百二歳

佐々木 千代子

人生は人と人をつなぐ旅曼羅の如樂しからずや

小畑 吉克

行く先は秘密のミステリーバスの旅亡き父の郷会津にありき

過ぎし年海外旅行に親しみし友の顔見ゆ成田空港

帰れない光背^{せお}つて何処へ行く淋しさ募る老の旅立ち

旅宿り越前カニの甲羅味噌地産料理で旅夜^{たびよ}楽しむ

船旅に酔いは付き物この先はパシー海峡はや怖気づく

妻と来し小さき旅の夕まぐれ湖^{うみ}のほとりに夕すげ咲けり

昼休み雛の心地で教室の窓より見上ぐ白い旅客機

旅先の数多景色もふる里の霊峰武尊に秀づものなし

来し方を旅になぞらへ顧みる七十二歳の見果てぬ夢よ

名目の研修済みて旅心地犬吠埼に丸む海見る

今にして「幸せにする」約束は一人旅なる見守りにありし

見送りはいらぬと言ひしに旅立ちの列車に手を挙ぐ父を思ほゆ

きつと行くさう想ひつつ時流れ出雲の旅路夢に訪なふ

加藤 益子

野村 訓啓

高島 栄策

高島 栄策

舘洞 嗣雄

眞庭 義夫

鷺沼 あかね

林 郁男

林 郁男

林 郁男

荒木 洋子

荒木 洋子

奥村 清美

鞆の浦の旅の宿にて酒を酌む漁火ほのか寂しらに見ゆ

雪被く大山遙か見渡しつわが峡思ひつ旅は始まる

雉鳩の迎へくれたりででぽぼとたつた三日の旅より帰る

菩提寺のお守り札をしのばせて妻は手わたす旅行鞆を

欲言へば手をたづさへてゆったりと旅してみたい山^{やまの}辺の道

研修の旅のグループ独り抜け不気味さ知ったパリの裏街

一枚の片道切符の旅をゆく明日はあの山一つ越えなむ

晴れわたる朝の空気のりんりんと旅立つごとき今日の出勤

バラ園を娘に伴はれめぐりゆく旅とし思ふ心は甘ゆ

イタリアの旅寝に家の恋しかり髪の毛なでる菩提樹の風

優しさが落ちてる街に行きたくて無情を踏んで旅をするのだ

私ほどの長生き近所にもうおらん死出の旅さえ比較する母

旅支度揺監の島エドワード乙女のアンの心は永遠に

石坂 喜美江

石坂 喜美江

真庭 ヨシ子

細川 浩一

細川 浩一

細川 浩一

角田 正雄

角田 正雄

青木 ソメ

湯浅 慧子

華 林

松本 進

多田 又山

「ふるさととは語ることなし」安吾碑は佐渡への旅を拒むがに立つ

古びたる旅行かばんの中になほ父の使ひし磁尺北指す

「みなかみ紀行」読み身に目覚む旅心そうだりハビリ必ず歩く

ネパールを旅せる君にいただきしアンモナイトの億年の夢

祖母の部屋入り日が照らす旅箆筒来る春茶会の形見となりぬ

旅の宿非日常の中に居てわが家の夕食考えている

紅葉の岩山を背にほほえみし山旅の日の夫若かりきつま

長崎の旅の車中にガイドより永井博士の実話に涙す

牧水の歩みし路をひたすらに兄と歩めた日光の旅

昔日せきじつの牧水の旅如何ならむ竹藪分けて山河越えしや

歩くから走る飛ぶへと変はる旅旅の風情はいずれにありや

四国路を旅して初めて覚えたり南無大師遍照金剛

在来の風とにほひに触れたくて短い旅は鈍行に乗る

庭野 治男

庭野 治男

鷺沼 あかね

大下 香

伊藤 理恵

寒川 靖子

白石 政江

白石 政江

白石 政江

白石 政江

大江 清流

佐々木 暁志郎

蛸山 恵子

来世をアサギマダラと化せたなら二千余キロを旅してみたき

蠟山恵子

旅の宿灯ともし頃は安堵して外つ国人の笑みに触れたり

竹内乞ふ吉

みちのくへ旅行の夫を送る朝の空は曇れどアカシア匂ふ

小林博子

秋晴れに浮かぶ能登半島さまさまに船より眺め旅の日ゆたけし

小林博子

「おこしやす」若き女将の京言葉その優しさに旅疲れ消ゆ

小林博子

若き日の夫からの文秘密裏に旅立つ日まで子に預け置く

高橋操

旅人も峠の茶屋も今はなく尾根まで桜咲き登る見ゆ

高橋操

喜びも苦しみ経し赴任地をアルバムがごと老いて旅する

番場正夫

老妻と苦節の旅をけふもまた人の字のごと支へ生きおり

番場正夫

金婚の記念日迫る四年後に夢は二人で北国の旅

杉木輝夫

未だ見ぬ歌枕あらば旅ごころやまぬわれかもあくがれて行く

星原風堂

光りつつゆつたり流るる利根川の海への旅路戻ることなし

松下昭代

篝火かがりびに妻麗しき鶉飼みずもい旅若き日の恋水面みずもに映る

岩谷隆司

米寿記念連れ立つ旅の牧水碑遺影微笑む夫七回忌

小野 ひさえ

あれよあれ七段に早なつてゐる飛車角桂馬歩成りの旅路

佐藤 春夫

風に吹かれ旅は湯の町坂の町見知らぬ人の輪踊りに入る

木立 徹

春風にさそわれて行く船の旅はるかに望む佐渡の島影

澤村 節子

分け入りし利根源流に遊びたる牧水の旅今に偲ばん

石坂 作次

我が郷を源として八十里大海原へ太郎の旅路

石坂 作次

谷千丈万年雪の一滴が利根の大河の旅の始まり

石坂 作次

夫とふたり旅路の想ひ出今も尚ときめきあざやか笑みもあふるる

星野 波奈子

あすアフリカへ長旅の孫庭にひとり蹴球してをり何思ひむ

星野 波奈子

旅先の神社仏閣の祈言はXデーまでぼけませんように

加藤岡 寿美子

無限大の宇宙を仰ぐ南空東北西旅にしありても

星野 真輝

緋目高のはららごあまた布袋草旅へ出づるか赤・白・小町

吉田 順代

我自身時間とお金無く旅出来ず今後二千元札保護したい

群馬 之空

知らなかつたみなかみ町百年を牧水の面影地旅おもかげちしたい

夕ぞらを銀のオブジェが上昇すわが旅カバンそこにはあらず

われよりも年若としわかのつま簡単に言ふなよ「先に旅立つ」などと

小海線こうみせんの一両車両に手を振れる坊やに応ふるわれは旅人

ぬざり帰り清女は夢む部戸しとみどに雪眺めつつ仕官の旅を

花散らふ堰に残れる白鳥は雪嶺越ゆる旅を畳めり

旅誘ふカラー豊かなチラシ伏せ蒔蒔植こんにやくうると地下足袋を履く

みなかみに旅の歌残して百年か「牧水の湯」にまぼろしを追ふ

新しきバスターミナル独り来て吾が街ながら旅めきめぐる

杳き日に逝きし母なり里恋ひつ恩師作詞の「旅愁」歌ひき

対岸に瞬き揺るる門司の灯を母の里への初旅に見き

伊勢参り叶はず逝きし母の靈心に宿し吾は旅する

戦災に永らへし友らと初の旅岐阜の恩師を訪ひし遠き日

群馬之空

西山博幸

西山博幸

飯田初江

高橋義仁

高橋義仁

板橋きみ江

板橋きみ江

松村照子

金井晶子

金井晶子

羽鳥一枝

羽鳥一枝

今日もまた旅にならって幸せを星に願って亡き妻おもう

「お孫さんですか」と問われるバス旅行杖つく母を支え歩めば

初音はつね聞く秘湯の旅路空碧く連れ添ふ二人古希と環曆

旅人のわれにまぶしき角隠し上杉神社に六月ろくぐわつの花嫁

思ひ出づベルリンの壁東独の旅の小庭に林檎実りたり

一枚のサインの重さ確かめて旅が始まる夏空の下

図書館のその一冊に手を伸ばす此処から私の旅が始まる

水色の少し褪せたる羽根を閉ぢ浅黄斑よ旅立ちはいつ

たらちねの母の最後の旅支度縦結びの紐涙濡れけり

旅ごころ失せねど気持の一步ひき桜に置き換ふジャカランダの花

脚を組み目をとじ風の音を聞く森ヨガいつしか旅路をさそふ

牧水の旅の歌をば楽しみてその道行けば夫は牧水

鹿児島島の旅の土産に紬買い母の面影胸内に住む

芦田 孝

小野 まなび

割田 一

谷光 順 晏

下平 小夜子

桑原 環 世

桑原 環 世

真庭 ヨシ子

吉田 まゆみ

田村 鶴江

田村 鶴江

持谷 靖子

手塚 光子

永年の夢と思へる船旅を香港めぐりし金婚祝に

広島の爆心地めぐり夫の撞く慰霊の鐘は旅空ひびく

若き日の友と歩きし山の旅谷川縦走なつかし思ひ出

外つ国の旅行案内届きたり八十路に近く夢馳するのみ

旅人となりて故郷の道ゆけばポプラ並木に風の鳴るをと

牧水の旅たづぬれば雲白く谷川はすみ秋深みゆく

あの時はきつと行こうと思つたの。二人の旅は泡沫うたかたの夢。

米二合修学旅行に持参せしあれは戦後も十年の頃

絵皿失せ般若の面のみ残れるは修学旅行の君が土産ぞ

トルコ旅行現地のガイドはヤヴズさん福山雅治に少し似た人

旅をする牧水の像連れ去られ今は何処いずこを歩きをるにや

庭先より葱を抜ききて薬味とす一人の朝餉妻旅行中

合歡の樹にかかれる雲は夕映えて旅心わくわが身を包む

手塚光子

眞庭アイ子

眞庭アイ子

石坂喜美江

小川高

谷川治

田倉あけみ

天田勝元

天田勝元

天田勝元

天田勝元

天田勝元

木村あい子

旅の夜を牧水読みつつ二合飲む心あふれてもう一合を

息子^こに逝かれ悲秋の余生生きぬきて母は旅立つ桜花の朝に

旅に写^とりし夫の遺影はわが胸に睦^とびし日びをほのぼの返す

痛きとも苦しとも告げずわが傍^{そば}に眠りしままの夫の旅立ち

生きるという旅の途中で身動きが取れないほどにお土産をかう

地図帳の古き地名にある印我が旅心さそひし名残り

春遅き会津の旅路白壁にうすやわらかき柳の影あり

御旅所をめざす行列春の陽をキラキラ纏い影も従う

我自身時折行ふ一人旅オリンピックの閉会式出たし

海外へ旅を共にし亡き夫^{つま}と旅路語れり滂沱の宿に

生きる意味問ひてさまよふ道草のほろ苦かりき若き日の旅

忍耐と記す鍾乳石みつかりぬ修学旅行のみやげだったか

上野駅で白黒テレビ初め見し修学旅行の中学日記

鈴木達也

熱田民恵

鵜野敏子

鵜野敏子

高橋圭子

上久保忠彦

鈴木桂子

江尻恵子

群馬之空

桑原しげこ

石井省三

熊ノ郷紀子

井澤栄一

ストーブに薪を焼べつつ馳す思ひ旅のメインの御水取り近し

菅谷 千恵子

昼月の出でていたるを記憶して叔父らと訪いし宮島の旅

佐藤 政俊

山間にポツンと灯の見えし時旅する者は詩人となりぬ

山縣 満里子

旅先の訛言葉に触れたいと居酒屋探しビールをたのむ

木暮 由利子

よみがえる修学旅行最終日あの子と初めてつないだ右手

木暮 由利子

旅行けば棚田に残る足跡の光はねつつ薄氷はりぬ

中村 佐世子

ブランドのターコイズ一つ旅先の緩みし気分がつい買はしめる

高橋 美枝子

寄り道をしてゆくことも悪くない読書は若き日の旅に似る

野上 卓

峠越え臥牛までの旅姿牧水食みしやまめの干物

森 義真

氏神の社の森を歩ゆみゐて湧き出づるかな旅する心

井原 志津枝

万葉の歌に焦がるる吾が旅は風土記の道を指で辿りぬ

風森 漣翠

白神のぶな林歩けばほつこりと旅の映像に引き込まれたり

佐藤 房子

若き日の船旅朝日に心寄せ今夕影の耀けるを愛づ

根岸 節子

口ずさむ「旅の衣をととのへよ」心は早やもフィレンツェに飛ぶ

北欧の旅に脳なずきの変わりゆく人も生活たつきもゆるりと懐かし

つと過すごしし旬日じゆんじつの間にたんぽぽの黄は絮実わたみだちて旅日びより和まつ

古妻ふるめつれ生あれし西尾にしお久く界隈かいわいを旅人さびて歩みけるかな

「おい俺はちよつと旅行して来るよ。」喜志子きしこは渡す合切袋がつさいふくろを

上州に紋次郎おり忠治おり無宿渡世たびがらすの旅鴉たびがらすなり

上州人びとわれ侠客きやうかくにあらざれど手みやげにする銘菓『旅がらす』

旅宿たびやどに明日の仕事の手順決め浜風に浅く眠ると夫は

天空の闇を走りし車窓より賢治の旅の星に触れたき

地図を見て訪ふ場所を決め美味な店おもふも楽し旅行日程

奈良のまち行き逢ふ人のおほかたは異国のことばを話す旅人

いつしかにつばめ旅立つ無人駅「頭上注意」の貼り紙失せて

クマケムシ羽化せば成虫おとなの白灯蛾しろひとり独りの旅に寄る辺もつかかな

玉井 令子

小林 久子

猪俣 軍司

猪俣 軍司

猪俣 軍司

猪俣 軍司

猪俣 軍司

千葉 ひとみ

川崎 富子

高山 克子

橋本 美津子

小林 阿弥子

西井 健治

神々の遊ぶ庭まで旅をせり平和を祈るアイヌとともに

喜寿迎へまだ余りある時の量油かさ絵料理と楽しむ旅なり

喜寿迎へ我が人生の道程みちのりはまさかまさかのドラマの旅路

うらにしの雨に煙りし北丹後傘も懐かし故郷ふるさとへの旅

初孫は無邪気に手足バタバタす夢を振り撒く旅の始まり

退職し終りし人と人言ふもまだまだ挑戦のりしろの旅

旅好む牧水の歌数多あまたあり暮坂峠良くも越えたり

又一つ無人駅増えからつぽの駅舎の続くローカルの旅

トンネルを抜ければ右手に妙義山現れ終る信濃路の旅

年老いてやつとの思い旅に出る暮坂峠の牧水歌碑の前に立つ

突然の病の旅に季去ときりて優しさ厳しさ余命を包む

オーソレミーヨ歌ひチップを徴収すトイレも愉快イタリアの旅

背をずいと押せば落つかの旅東尋坊好晴をうっとり断崖に佇つ

西井健治

長島勝廣

長島勝廣

長島勝廣

長島勝廣

長島勝廣

関和子

関和子

深津一次

過外美代

竹野紀子

谷中明子

古澤澄子

娘夫婦に連れ立つ旅の東尋坊断崖の絶壁夫と遊覧船乗る

牧水と縁ある友に導かれ我れ古希にして水上を旅す

故郷に父母と居る夢を見る幼なじみとの旅の途中で

京の旅馴染みの言の葉上州弁過客となりてはや里恋し

冷害も風水害も無き里の桃源みなかみ旅へと誘ふ

みちのくの時雨に遭ふて買ひし傘旅の土産となりけり

灘五郷旅にきて酌む蔵元の樽の杉の香酒をすすます

三頭立ての馬車に揺られて夕方を旅路の末のロヅジに向かう

憧れた夫と歩みて五十年健やか旅は幾年叶う

子育ての夢追う旅は遠に過ぎ夫と開くは子等のアルバム

碑の上の旅装の写真送りくれし友は友なり亡き妹の

晩秋の旅の鞆にはづみをり池内紀氏牧水のこゑ

銀翼の影を映せる水田の光るを見つつ飛機に旅立つ

古澤澄子

芳賀佳寿子

萩原教子

遠藤長代

遠藤長代

蒼浪

向井靖雄

篠田武子

関口保子

関口保子

福原美江

福原美江

杉本弘子

防人の長き旅路をうれいたり筑紫大野の城跡に立ち

走れ走れ琵琶湖を旅のともとして北へ北へとサンダーバードよ

真つ白な雲に追われて靴飛ばし気ままな旅の行く先決める

亡き夫の足跡たどる旅なれど谷を越えたり五年をすぎて

千曲川旅情のうたを口遊み君と歩みし小諸城址よ

津軽旅亡夫と聞きし「じよんがら」の三味の音今も耳に残れり

漁火が見えかくれする能登の宿亡夫と来た日を思い出す旅

庄内路潮騒の味売る女の訛る言葉に旅情おぼゆ

悠久の満天の星眺むれば宇宙の旅は人類の夢

「お帰り」といふ母の声きこえくる気のする玄関旅より帰れば

兎と遊ぶしりとりまたも「ん」で終る旅より我が家に帰りしやうに

卒寿の母をショートステイに預け入れうしろ髪ひかれ旅に出でゆく

軽がると石段上りし九年前杖つく旅の山寺参り

高橋 惠

知己 凜

知己 凜

千田 政子

高橋 吟子

木村 初枝

木村 初枝

木村 初枝

杉木 輝夫

加藤 トシ子

加藤 トシ子

名越 文子

上田 康彦

思ひ出に馳せゐる今宵この宿にひたすら捜す旅人師の星

戸嶋 智鶴子

血族か否かは知らね雁三羽北を指す旅鉤を乱さず

板橋 きみ江

暁のいづちに羽を休むるや鉤なす雁の北を指す旅

板橋 きみ江

集団就職せし弟よ黄泉の旅の果て処にけふより父母に甘えよ

板橋 きみ江

闘病のたたかひ終へて夫が今静かに眠る旅立ちの朝

瀧田 茂子

脳破れいのちは救えど足麻痺で好きな旅行と疎遠となりぬ

二牟礼 勉

あの志摩じゃないから行けた我が軽で「四万温泉」と呼ぶ母旅の香いまも

忽滑谷 三枝子

「さあどうぞ」「まあまあ」と返しつつ社員旅行の宴会こなす

曾我部 れいこ

塩尻とう名前の由来珍しみ峠越えたり妻との旅に

福田 達雄

鶉の雛の旅立ち何時なるや戸口の芙蓉に巣のあるを知る

石坂 喜美江

天仰ぎ山川眺めてふるさとのご恩謝しつつわが旅歩む

中島 淑子

「賢治」さん、震災忘れず暮します初の東北バイク一人旅

岸 和夫

病む妻をひとり残せし伊豆の旅とぶ海鳥もわが思ひ知るまじ

伊与久 敏男

旅宿にたはむれて持つ馬上盃さし合ひやがて哀しきかたち

伊与久 敏男

この秋は先師の名付けし会の名の「みなかみ」その地を一人旅せん

富田 茂子

春の旅突然余命なきを知りつれていけぬと言いし夫はやつま

赤澤 皆

明日あると思ふが故に旅枕次日が今日に日毎に新た

小林 喜佐男

幾山河尋ねもとめん旅人を今日はみなかみ明日は暮坂

小林 喜佐男

一日はささやかな旅その旅の終わりに君とスコッチを飲む

福西 直美

地図にあかく丸を印しぬ二人旅に君とわたりてきたる橋の名

福西 直美

律儀なる父の旅立ちそのときの気配を寺に聞きしを憂ふ

大竹 春江

歌ひ手は山口百恵の息子とふ「いい日旅立ち」しみじみと聞く

大竹 春江

朝八時「草津よいとこ」曲流れ吾は草津の旅の宿にて

中村 葉月

幽玄の言葉しかなし紫禁城の美に吞まれつつ旅を吸ひ込む

高橋 美枝子

忘れぬ君と旅せし思い出のくれない色のベネチアグラス

三宅 照司

旅立ちの新幹線の窓過ぎるわがふるさとよそゆきの顔

俵山 友里

この山もあの海もまたどなたかの日常なりけり旅し癒やさる

俵山友里

窓いっぱい景色眺めてコーヒ啜る旅のオアシス笑顔溢れる

ベネット 昭子

死ぬ前にもいちど行くと秘めた旅遙か彼方のスイスは遠し

ベネット 昭子

じわじわと人生の旅後半にまだまだ続く小道となつて

ベネット 昭子

年齢の進むにつれて旅先は近郷なりて温泉めぐり

林 恵美子

旅をして帰りて思ふ「みなかみ」の空気がうまし水は一番

林 恵美子

飛機の旅雲に表裏のあるを知るいつも見上げる雲は裏側

林 恵美子

カンボジアにてジャスミン香るレイを受け留学生との再会の旅

阿部 多恵子

輝ける河の流れにパドル漕ぎマングローブの森へ旅ゆく

阿部 多恵子

はるかなる牧水の里海越えて上毛野に旅アサキマダラよ

木村 朝次郎

精出して軒に巣づくるつばくろよ旅立ちし国は南のいづこ

割田 良次

二日間共に旅せる絹帽子風に吹かれて十国峠

後藤 節子

二人旅浄土ヶ浜に玉砂利の白きがまぶし松葉ちりしく

久野 とし子

手のひらに牧水の歌書き記す母は黄泉路のすでに旅人

三陸の旅のはじめは紺青こんじょうの海と貞任岩さだとうにまみえり

耐たいるしか我知らねども旅を知り水の旨さ知るみなかみの宿

旅人が泊りし宿をふりむけば法被おかみの女将手をふりをりて

食すこと禁じられたるタラの芽の緑繁らす福島みちの旅路

がん告知あの日ころんと抜け落ちた螺子ねじをさがして旅の停車場

「走ろう」と父と手つなぎかけて行く熊野古道三世代の旅

肉切れて鱭の折れける旅を終え腐ちゆく鮭の眼に空の青

血管となりて地球を二周半われの内にも宇宙の旅が

水脈みお引きて入りくる船が旅心膨らますごとひびかす汽笛

みなかみの旅に睦むつみし思ひ出の写真に並ぶ君のいま亡し

旅に出る時と旅から帰る時酔った君問う死ぬならどちら

歳重ねうれしきことは旅先で一人ぶらりと入る居酒屋

久野 とし子

久野 とし子

石崎 正次

石崎 正次

中澤 ひろみ

中澤 ひろみ

廣田 ゆり子

大澤 澄代

大澤 澄代

阪根 まさの

井門 きみこ

田中 亜紀子

田中 亜紀子

旅先の通りすがりの町外れ南教えるソーラーパネル

立ったまま白いパンツのはける今青春切符でリッチな旅す

単線の鉄路はつづく海沿いを旅の友のカップ酒ゆらし

旅先の里の草葉の露の夜に喉をしめらす一人酌む酒

喘ぎつつ登る弥山に立ちて待つ青き目やさし旅の母と子

旅の空西の方角故郷ふるさとと見上げる虹よゆっくり消える

これよりは三国峠と申します旅の者への言の葉やさし

たんぽぽの命の旅の始まりに貢献したくそつと息吹く

この町に降り立つ我は旅人か父母逝けば帰省でもなく

旅すれば地酒を捜すのんべえは濁醪どろろう見つけすぐサイフだす

若き憂ひ秘めて旅せし上の原すすきの穂波ゆらめく中を

若き日に貪り読みしヘインのさまよえる湖夢に旅する

旅の宿出会いし酒や酔芙蓉盃にうつりし花の思影

生田 麻也子

加藤 シズカ

凜 七星

凜 七星

鹿島 壽美子

齋藤 宏子

齋藤 宏子

木村 嘉子

木村 嘉子

土屋 明美

新井 八重子

新井 八重子

可子

嘘を吐く前の涼しき笑顔もて父は旅立つ晩夏の朝に

初春や妻の忌過ぎし想い出のアルバム胸に旅路辿らん

数々の旅を重ねし夫と吾心にのこるは陸奥のねむ

羈旅の途で恋した人と再会しふと目覚めれば夏の夜の夢

一人旅単車を駆けてみなかみへ川のせせらぎ涼送る夏

逢ふたびに一期と思ふ桐の花沁みて吾が旅終へなむとする

行先をきめずに乗って伯備線あさぎまだらも旅立つ皐月

先生も児童も親もこの吾もたまさか会える時空の旅人

農機具の突如の怪我にてポーランドへの旅を諦め夫に付き添ふ

平成の御代から昭和・大正とゆっくり旅する古事記までの道

幾山河幾年月を旅ゆきぬわれはさながら流離の雲

佛壇の灯明線香消しました旅立つ朝の足迷ひなし

無意識に震災の跡さがしてたバス旅行には思いそれぞれか

金澤 諒和

安曇 穂高

吉田 江美子

一色 伯恭

一色 伯恭

戸嶋 智鶴子

山崎 佳奈子

フルカワ 辰尾

中澤 いし

北島 功

児玉 佳久

廣浦 幸子

牧原 正枝

由々しかる美人にあらねど「よぐ来たね」旅人あなたへ大吟醸を

蓬田真弓

空襲にふるさと東京出でし父長き旅路か秋田に眠る

蓬田真弓

何もかも新鮮であれ旅の日は二人向き合う食事の時も

野添一男

「やりたいこと、ないよ？」と言った弟が明日イギリスの旅から戻る

下谷育正

病気かと電話かかり来ふるさとの古家にひとり旅寝の朝を

深澤みどり

ひろい栗鼠天に旅立ち亡骸とうれしがなしい泣く吾子のすがた

大山智也

篠笛にいやされ続け無の世界老いて姫なり天空の旅

深代里子

クレヨンをリュックに入れて父と娘の初めての旅動物園へ

岡田敦子

空間を支配するやう腕広げ阿修羅は何を旅びとに問ふ

篠原香代

息切らし四十二粒キロのひとり旅慈雨降り虹が笑顔をもどす

篠原香代

旅先の大三坂で見た君は硬派消し去り猫を手招く

篠原香代

地球儀を回して母は旅をする北極指差し見せる向日葵

木内美由紀

タイピンの真珠ひとつぶ衿につけ旅に出かけむお守りとして

鱈本ミツ子

旅遙かアンコールワットの日の出待つ明るむ空の色は一瞬

百日草畑の隅に旅生りよせいして草にも負けず赤々と咲く

銅鑼どらの音は胸に響けり佐渡へ発つ旅の甲板朝風強く

旅鞆触ればノルウェイ思ひ出す白夜のパブで語りし人を

夏休み十才の孫一人旅幼おさなさ消えて自信と戻る

結ばれて夫とこの地で五十年二人の旅路日々感謝す

初孫に命のバトン渡す如友ごとは旅立つ蛍舞う夜に

妻は早や二ヶ月さきの旅装りよそうせり寒ひか九月の北海道は

手のひらの中より黒海広がれりスカイプする子旅の半ばに

蝉声の辻に草鞋を置きしまま輿に揺られて旅立ちし夫

お別れの悲しみの扉そつと閉め景色仰ぎ見る旅まだ途中

能登へ行く夢がかないてひろびろと砂場を走るバスで行く旅

牧水の歩みし道をたどる旅木かげをゆらすせみしぐれかな

柳澤賢一

行正健志

藤原礼子

穂苺真泉

澁谷典子

澁谷典子

澁谷典子

土居健一

中本久美子

杉崎康代

浅尾美紀

東多賀美

藤井紅苑

薄緑色せる天蚕倉渕の旅に探しぬ祖母に観せたく

旅に出づるわれに息子は幾たびもまた戻り来て見送り呉るる

空見上げ旅行く娘等を案じをり畑には一雨ほしと思へど

連日の猛暑は山に逃れ来て天然クーラー日帰りの旅

旅は好き大浴場で腕伸ばす狭き我家は心を解す

妻籠宿を縦つまごじゅくに流れる白き雲ほわりほわりと旅を続ける

初対面胸のときめく一目惚れひとり旅ゆく出逢ひ求めて

君と逢い旅路の中で語り合う由布の山から見える景色を

降り立てば迎へて来るるふる里の風よ山河よ父母をらずも

峡の奥白き岩間に湛へたるあをき水はも風ふき荒れて

牧水は四十四で名を残す八十路のわれは酒とさすらう

石舞台ほの暗き中ひらひらと桜舞い込み飛鳥へさそう

宇奈月やどこも涼しき水の音吾が住む里の川を想ひぬ

湯 浅 茂 子

湯 浅 茂 子

湯 浅 茂 子

茂 木 美 江

横 田 靖 子

新 谷 洋 子

西 井 健 治

濱 崎 清 修

北 村 宏 子

矢 端 純 子

高 倉 嶮 風

小 林 の り 子

佐藤 かずなり

濃緑の水面に時の髣髴を寄せ十石舟は寺田屋を過ぐ

明けて今朝大根刻む足下に伊豆の海より寄せてくる波

マニキュアを塗らなくなったゆびさきであなたがしづかに開く寝袋

夫と子と訪ねし街を地図帳に辿りて一日ゆるりと過ぎぬ

南国と倭国とふたつづばくらめ山河を渡る国境もなく

鎌倉へ先師尋ねて行きし日あり「歌人日誌」に記されています

行列に並びカニマヨチャーハンを都会の人の顔して食べる

一人床冷たかり冬なれど明日の地想えば熱く寝も入らず

国境孤島の人の情深く海ただ青く空ただ青く

海遠く家族で出かける海の宿女将の笑顔と美味しい魚と

北の街幣舞橋より見る夕陽釧路川面を真赤に染めて

大津波線路破壊のリアス線復興果たし絶景走る

残雪の岳の勇姿を窓辺にしSLの気笛緑に消える

河田 琴栄

大橋 光子

東風 めかり

金田 美恵子

村尾 金一

金山 黎子

坂東 典子

浦田 穂積

浦田 穂積

林 正典

原澤 芳雄

原澤 芳雄

のぼる

牧水も昌子も入りし法師の湯今宵は友と青葉に癒され

夕映に武尊の残雪耀きて初咲の梅ほのかに香る

鍋越の峠路すぎて茶屋の跡年に一度のバラ苗買ひし

深山より水流れ着く御社の九龍の藤歴史に映ゆる

岡田敦子

保坂スミ

加藤正

加藤正

若山牧水第十二回顕彰全国大会みなかみ大会

平成三十年度若山牧水みなかみ紀行短歌大会作品集

平成三十年十一月十七日発行

編集／発行 若山牧水顕彰全国大会みなかみ大会実行委員会

〒三七九―一三〇五

群馬県利根郡みなかみ町後閑三二一―一

みなかみ町教育委員会内

電話 ○二七八(二五)五〇二五



若山牧水第 12 回顕彰全国大会みなかみ大会

平成 30 年度若山牧水みなかみ紀行短歌大会

開催日 平成 30 年 11 月 17 日

会場 源泉湯の宿 松乃井 群馬県利根郡みなかみ町湯原

主催 若山牧水顕彰全国大会みなかみ大会実行委員会

共催 みなかみ町牧水会

後援 みなかみ町、全国牧水顕彰会、みなかみ町教育委員会、群馬県、沼田市、片品村、みなかみ町観光協会、日本ほろよい学会、中之条町牧水詩碑保存会、三成社株式会社、群馬県酒造組合沼田支部、利根沼田酒蔵ツーリズム協議会、群馬県歌人クラブ、月夜野俳歌壇、水上短歌研究会、桑の実俳句会、心彰流愛吟詩道会、沼田エフエム放送株式会社、上毛新聞社、おちあいしんぶんマイタウンたにがわ